

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 27 年 6 月 12 日現在

機関番号：32620

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2014

課題番号：25862121

研究課題名(和文)臨床看護師の看護実践プロセス・パフォーマンスの特徴と評価方法に関する研究

研究課題名(英文)A Study on the characteristic and evaluation of nursing practice process performance

研究代表者

三宮 有里(sannomiya, yuri)

順天堂大学・医療看護学部・助教

研究者番号：60621729

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、看護職がもつ看護実践を向上させようとする態度や志向性を明らかにすることを目的とし、看護実践プロセス・パフォーマンスの特徴について検討した。研究デザインは、質的帰納的研究である。臨床経験年数が12年以上の10名の看護師を対象とし、半構成的面接法を用いてデータを収集した。その結果、【看護実践基本スキーマ】、【自律への欲求】、【スタッフとの密な連携】、【自分の学習を設計】の4つのカテゴリと22の概念が生成された。また、この調査結果を踏まえて、看護実践のプロセスに意欲的に取り組む行為にはどのような特徴があるのかという分析視点で項目案の内容を検討し、項目案を作成した。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study was to clarify the attitude and intentionality of which tends to improve clinical nursing practice, and to examine the characteristic of nursing practice process performance in Japan. The study design is based on qualitative inductive study. Semi-structured interview technique was used with 10 nurses who have been working over 12 years. 7 categories and 22 distinct concepts were identified as the result; "basic schema of nursing practice", "desire for professional autonomy", "closer cooperation with the staffs", "design their own learning". On the basis of the above research, the scale was to make a scale for nursing practice process performance.

研究分野：基礎看護学

キーワード：臨床看護師 看護実践能力 プロセス・パフォーマンス

## 1. 研究開始当初の背景

今日、看護の役割や能力向上に対する期待が社会的に拡大している。そのような社会要請の中で、看護職が看護の専門性を維持・発展していくためには、現在の医療の趨勢を認識し、生涯にわたる学習を通じて、質の高い看護を実践していくことが必要である。また、看護実践能力の水準を高められるよう、学生から看護職へと続く継続的な学習過程を支援し、看護の質の向上につなげることが重要であるといえる。

研究代表者はこれまで、看護師がたゆみなく自己研鑽を重ねていくためには、自らの課題や目標をもちながら行動できるようになることが重要であると考え、看護師が自分の目標をもつプロセスを明らかにする研究を実施した。そこでは、看護実践や自らの仕事ぶりを省察しながら、課題に真摯に向き合うことが、自らの目標をもつことに影響を及ぼすという、プロセスが明らかになった。この研究から、看護職の自律性や成長意欲は、自らの看護実践のプロセスに着目し、実践を向上させようとする態度や志向性に反映される可能性があると考えられた。

このような成長に対する態度や志向性は、「プロセス・パフォーマンス」という言葉で表現されている。この言葉は、大学生の学習を検討する視点として挙げられ、溝上によると、プロセス・パフォーマンスとは、「行動の結果や報酬に着目するのではなく、プロセスに着目することで、自身のパフォーマンスを向上させようとする態度である」と説明されている(溝上, 2010)。また、「知識や技能の獲得は、必ずしも高い学習プロセスの動機にはつながらず、自身のパフォーマンスを向上させることを目指す態度や志向性が、レポート課題やプレゼンテーション、ディスカッションなどの種々の学習プロセスにおいて高いパフォーマンスを示す」と述べている。さらに、「現代社会では、標準的・適応的な能力を基盤としながらも、状況や場面に応じて課題を個別的・創造的に仕上げ、対人スキル、人的ネットワークも駆使する能力が必要とされることを受けて、このプロセス・パフォーマンスは、現在社会が求めている能力につながる行為である」と述べている。

以上のことから、現在の医療や看護の趨勢を踏まえて、看護職がより優れた看護実践能力を発揮するためには、看護実践を向上させようとする態度や志向性を持ちあわせていることが必要であると考えられる。そして、プロセス・パフォーマンスの観点から、看護職がもつ看護実践を向上させようとする態度や志向性の特徴を明らかにすること、さらには看護職の看護実践に対する態度や志向

性を測定することは、看護職ならびに看護学生の教育支援方法のあり方を検討する上で有効であると考えられる。

看護職の成長について、キャリアディベロップメントに関する先行研究では、新人看護師、中堅看護師、中間管理者といった対象者に焦点を当てて、それらの看護職がどのように成長していったのかという経験内容やプロセスについて多く報告されている。また、異動(中村, 2010; 吉田ら, 2013)、転職(伊東, 2011)、再就職(小西ら, 2014)、正規雇用から非正規雇用へ(南谷, 2011)といったキャリアの変化の様相を明らかにした論文も報告されている。しかし看護職の看護実践を向上させようとする態度について、言及している報告はあまりみられなかった。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、看護職がもつ看護実践を向上させようとする態度や志向性、つまりは看護実践プロセス・パフォーマンスの特徴を明らかにすること、さらには看護実践場面における概念として、看護実践プロセス・パフォーマンスを提案することである。また、インタビューで得られたデータを、看護実践のプロセスに意欲的に取り組む行為にはどのような特徴があるのかという分析視点で項目案の内容を検討し、項目案を作成した。その結果は、看護職の成長意欲や自律性に関する基礎的資料になり得ると考えた。

## 3. 研究の方法

### (1) 研究対象者

関東、東海地方の病院2施設に、研究への協力を依頼した。それらの病院に勤務する5年目以上の臨床看護師で、看護に関連する資格を取得している者を研究対象とした。一般的に5年目以上の看護師は中堅看護師と言われ、自己の専門性を極め、看護の質を支える重要なポジションにあると言われている。また、看護の専門資格を習得している者は、看護を向上させようとする態度や志向性が如実に表れているのではないかと考え、これらを研究対象者の条件として設定した。

### (2) データ収集方法

インタビューガイドを用いた半構成的面接法でデータを収集した。面接は、研究対象者1名につき1回30分から60分程度実施し、具体的に看護実践場面を語っていただき、そ

こで行った選択的行動について詳しく聴き取った。研究対象者の了承を得て、面接内容を録音、記録した。分析を過程において、新たな概念の生成の可能性を確認しながら、理論的サンプリングを行い、データ収集を行った。

### (3) データ分析方法

データ分析は、木下が提唱する修正版(modified) Grounded Theory Approach (以下、M-GTA)の手法を用いた。以下に記した手順で進めた。

まず、分析テーマを「看護実践を向上させるために、どのような行為を選択し、どのように看護を実践しているのか」と設定し、インタビューで得られた内容を逐語録としておこし、作成した逐語録を熟読し、全体の意味を把握した。

次に、分析テーマに照らして、データの関連個所に着目し、それを一つの具体例とし、解釈的な分析によって概念を生成した。概念をつくる際には、概念名、定義、具体例、理論的メモからなる分析ワークシートを作成し、1概念につき1ワークシートの形式で記入する。自分の考えに対して別の解釈がないか、また生成した概念の対極例があるかを検討しながら進めた。さらに、概念間の関係性を検討し、複数の概念の関係からなるサブカテゴリーおよびカテゴリを生成した。

### (4) 倫理的配慮

研究代表者の大学の倫理委員会の承認を得た後、実施した。研究対象者に文書と口頭で研究の目的と概要、自由意思による参加と撤回の自由、データ匿名性の厳守を説明した。また、対象者から書面による同意を得た。インタビュー後は個人情報の漏洩の防止のため、個人を特定する情報は残さず、匿名性を確保することを厳守した。本研究で得られたすべてのデータは、本研究の目的以外には使用しないことも合わせて説明した。

## 4. 研究成果

### (1) 文献検討

看護実践における態度と志向性に関連する看護実践能力や看護実践のコンピテンシーをテーマにした文献・資料を収集した。先行研究を概観すると、看護実践能力の研究は1990年代から米国で数多く発表され、看護実践能力の構成概念や測定尺度の開発がおこなわれていた。看護師の看護実践行動を測

る尺度として「6 D-Scale (Six-Dimension Scale)」が開発され、翻訳された日本語版(長友ら, 2001)の尺度の信頼性、妥当性が検討され使用されていた。2009年には、日本における看護系大学卒業看護師が臨床実践5年目で到達すべきと考える看護実践行動を測定する尺度が開発されていた(中山, 2010)。看護実践能力や看護実践のコンピテンシーには、看護を実践する上で必要な態度や志向性を含んでいるが、より優れた看護実践を実施するに至る個人の行動選択のプロセスや看護実践を向上させようとする態度や志向性に焦点を当てた研究はあまりみられないことが確認された。

### (2) 調査結果

10名の臨床看護師の協力が得られた。研究協力者の年齢は36~52歳であり、経験年数は12~22年(平均17.7年)であった。看護師養成所3年課程の卒業者は8名、大学や大学院の卒業者は2名であった。面接時間は、30分から63分で、研究対象者全員から録音の同意を得た。以下、カテゴリは【 】、概念は 〃 で示す。

データ分析の結果、【看護実践基本スキーマ】、【自律への欲求】、【スタッフとの密な連携】、【自分の学習を設計】の4つのカテゴリと22の概念が生成された。

臨床看護師は、実践プロセスの【看護実践基本スキーマ】を形成していた。また、臨床看護師は【自律への欲求】を持ち合わせつつ、【スタッフとの密な連携】を図るという特徴をもち、看護の対象者に応じて、看護実践の基本スキーマを活用するために【自分の学習を設計】をして、より優れた看護実践を目指していたことが明らかとなった。以下、【自分の学習を設計】について、具体的に記載する。

【自分の学習を設計】には、〔看護師としての今後の目標設定をする〕〔分からないことを徹底的に調べる〕〔フィードバックを受け止めてリフレクションをする〕〔自分で学習を動機づける〕の4つの概念が含まれた。

〔看護師としての今後の目標を設定する〕では、本研究の対象となった臨床看護師は、病院組織内における自分の責務・役割を認識し、その役割を発揮するために新たな活動をしていきたいという思いがあると語った。その新たな活動とは、患者にとって最適な時期に、最善の方法で看護援助をすることを、さらに実現していくための行動を意味していた。

〔分からないことを徹底的に調べる〕では、本研究の対象となった臨床看護師は、看護を

実践する上で分からないことに遭遇したり、つまづきを感じたりしたときに、先輩や後輩という立場に関わらず看護の「仲間」から、知識、概念に関する情報を吸収するという行動を積極的にとると語っていた。また、看護職以外のスタッフ・同僚からも知識を得たり、病院内外の勉強会に参加したりすると語った。職能団体や学会等の指針を調べたり、場合によっては看護実践に関する文献をレビューしたりしてさらに追究することもあると語っていた。

〔フィードバックを受け止めてリフレクションをする〕では、臨床看護師は、患者の言動というフィードバックを真摯に受け止めて、自分の言動を意識的に振り返るようにしていると語っていた。また、スタッフからの反応も素直に受け止め、自分の行動に対する課題や修正点を見出し、次の看護実践の機会に活かせるようにしていると語っていた。

〔自分で学習を動機づける〕では、臨床看護師は、設定した今後の自分の目標に関する学習をしたり、その自分の学習を振り返ったりする過程において、自分自身で動機づけのコントロールを図るようにしていると語っていた。また、ある学習をしたことによって生まれたポジティブな反応の積み重ねが新たな学習意欲を高めると語られていた。さらに、目標を達成するために努力し続けるという意思があり、その思いで自分のモチベーションを上げていると語っていた。

### (3) 考察

調査結果から、看護実践を向上させようとする態度がある臨床看護師は、専門職としての自律への欲求を持ち、看護援助を展開する基本的な能力と他者との連携・調整能力を活用して、患者にとって最適な時期に、最善の方法で看護援助をするために、自分自身の学習を設計する行為を選択するという特徴があることが考えられた。プロセス・パフォーマンスとは、「行動の結果や報酬に着目するのではなく、プロセスに着目することで、自身のパフォーマンスを向上させようとする態度である」(溝上, 2010) という定義を踏まえると、看護展開のプロセスに着目して、看護援助を展開する基本的な能力と他者との連携・調整能力を活用しようとする、さらには、患者にとって最適な時期に、最善の方法で看護援助を提供するために、自分自身の学習を設計する行為をとるということを選択すること、あるいはそのような意思があること、が看護実践プロセス・パフォーマンスの特徴であることが考えられた。

### (4) 研究の限界と今後の展望

本研究では、研究対象とした看護師が限定的であるため、対象者数の拡大、異なる施設の看護師を対象とした調査の実施が必要である。また、看護実践場面における概念として、看護実践プロセス・パフォーマンスを提案するためには、抽出した概念、カテゴリ間の構造をさらに精緻に検討し、看護実践を向上させようとする態度形成の要因について、明らかにしていくことも今後の課題である。

看護実践プロセス・パフォーマンスの尺度の項目案の作成には、看護教育学の専門家にスーパーバイズを依頼し、項目の内容の妥当性の検討、文章表現の修正を実施した。直接的な患者ケアを実施している臨床看護師を対象に調査を行い、調査結果を踏まえて尺度の内容妥当性を高めるための検討を行った。今後も看護実践プロセス・パフォーマンス尺度開発に向けた取り組みを実施していく。

さらには、看護実践プロセス・パフォーマンスの構造を明らかにし、看護実践のパフォーマンスを向上させる態度形成を支援する具体的方策について、今後検討していく。

### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔学会発表〕(計1件)

三宮有里：臨床看護師の看護実践を向上させようとする態度に関する研究，日本看護学教育学会，2015.8，アスティとくしま（徳島県・徳島市）

### 6. 研究組織

#### (1)研究代表者

三宮 有里 (SANNOMIYA, Yuri)  
順天堂大学・医療看護学部・助教  
研究者番号：60621729

#### (2)研究分担者

なし

#### (3)連携研究者

なし